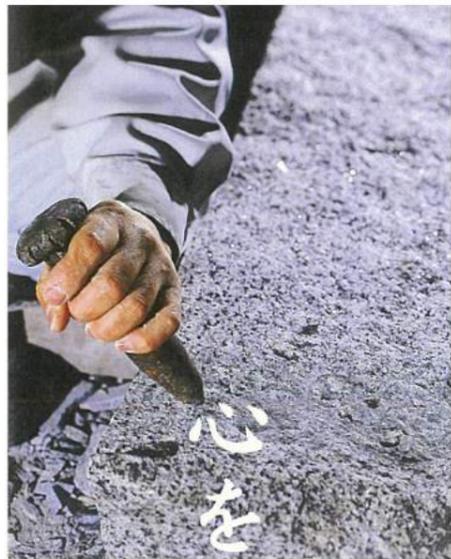


MoriChu

the stone mason

1908



心を刻む

石心傳心

ishin denshin

想いを伝える。

雪溶けの季節。冬の眠りから目覚め、顔を覗かせる草、花、動物たち。お互い、新たな再開を祝すかのように賑いを見せる。石もまた山や野原、川辺で姿を見せ始める。清らかにせせらぐ川。眩い川面。水のプリズムを通り届く光。川底に映る石たち。川辺では石も毎冬表情豊かだ。野山では、いつもと変わらない姿で迎えてくれる石もある。本当は年々姿を変えているのかもしれないが、春が訪れ、道標のように同じ場所にどっしりたたずむ姿は安堵を与えてくれそうだ。そもそも、いつどこからやって来て、どのくらいここで見守っているのだろうと推測して想う。その悠久の時の流れ。春、生命を感じる季節。

「あの岩から、あの石橋から飛び込めたら仲間に入れてやろう」少年時代、誰もとなく決めた掟やルールが海や山、川には存在した。そんな時、岩や石はいつもより大きく感じられ、その大きさを少しだけ恨んだり。それを征服した時には自分が少しだけ大人になったような気がして、今まで見てきたよりも小さく思えたり。石蹴り、石投げ、魚獲り。少年時代の夏、とりわけ石はとて身近な存在で、飛躍を繰り返されて分かるその痛さ。そのすつしり出した重み。そこから。本当の強さや、弱さ、もろさを学ぶこともある。何気なく手にした石の色形が特別な宝物に思え、捨てられず持ち帰る。一つ道草してみる度に、また一つ発見をする。この時代の体験は、鮮烈な記憶となって今も残る。夏。もう一度、未舗装の道を、道草してみるのもいい。

MoriChu
the stone mason
1908

意志を刻む

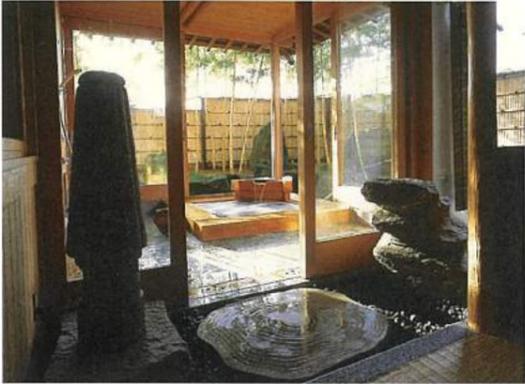
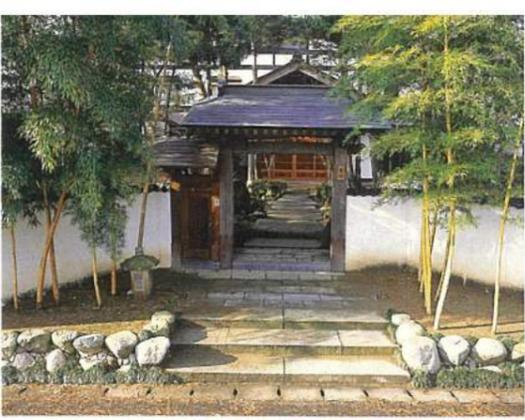


森忠石棧店

わたる風に、空の高さに、虫の音に。秋の気配を感じると恋しくなる物の一つに石焼いもがある。どこかノスタルジックで、もの悲しいような客寄せの音。味もそうなのであろうが、あのスタイルこそ旨みがあるのであらう。仮に石の代用が可能で、さらに、機能的にも勝っているものが、登場したとしても、

「やはり石焼いもは石でない」と。そんな声が大半を占めるのではないだろうか。石のもつ遠赤外線効果が芯までムラなく熱を通すからと言われているが、やはり石の素朴で優しい。温もりの効果であると信じてたい。やはり石でなくてはならないのである。石とはそんな存在である。代用できないもの。できても何かもの足りない。秋、訳知れず温もりが恋しい季節。優しくなれる温もりがここにある。

「石の上にも三年」「転石に苔むさず」年の瀬も迫ると、一年を振り返りこんな言葉がふと浮かんだりもする。考えてみると石に例えた諺は、なにか人生観を説くようなことが多い気がする。確かに堅物でもの言わぬイメージはあるが、向き合ってみると、その出で立ちに、なんとも悟られるような時がある。厳しくも、優しくも、どう目に映るかは自分次第なのであろうか。石は暑い時には熱く、寒いときには冷たく、ありのままだ。己と向き合いたい時の相棒に、なんともふさわしい雪国へ雪の便りが聞こえる頃、石は白い化粧を冠し、静かに深く、長い眠りにつく。そして春、また変わらぬ姿で迎えてくれるであらう。



「威厳と風格の中にくつろげる空間」
 石には幾つもの顔があり、それが私たちの生活の一部となったとき、更に豊かな表情を創り出す。時として厳しく、時として優しく。石は私たちの生活の中で自らの個性を尊重しながら調和する。

玄関、待合、風呂場の敷居石は、十二尺から十五尺の継ぎ目の無い一本物の白御影石を使い、通常は石にレール金具を埋め込むところ、敷居石にV字型のレール溝を彫り、石に直接戸を建てる方法で、力強さと無駄を排した美しさを…。風呂場の手前の踏み石は、磨いた表面にサンドブラストで木目を彫り、すべり止め効果とやわらかさを…。

ストープの周りには淡い暖色系の御影石で気品と温もりを…。そつと石に触れ、石を見つめて語りかける。

穏やかで心地良い時間がそこにある。

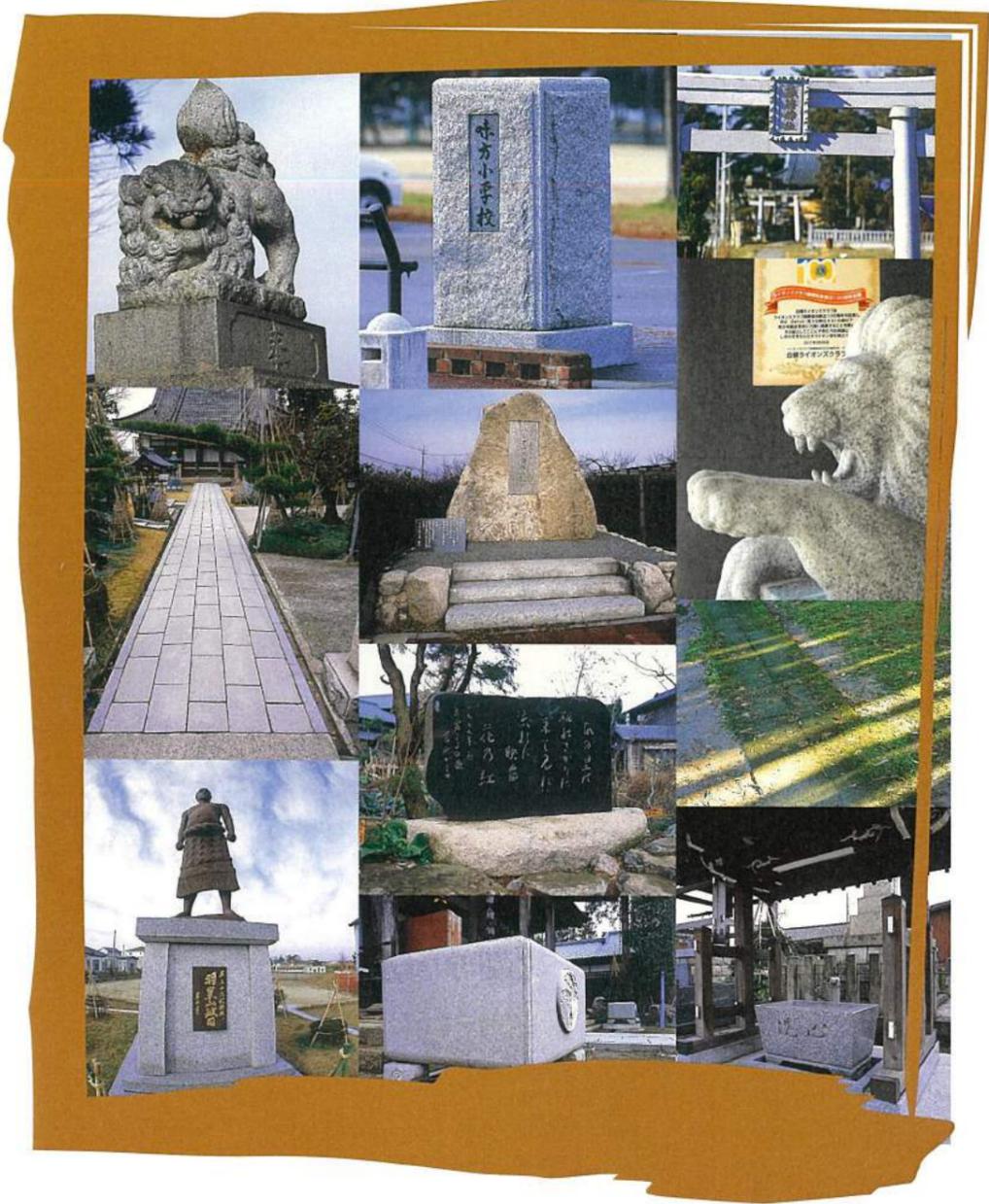
(写真・石工事演出／五代目 森澤達矢作)

石に語りかける瞬間がある。

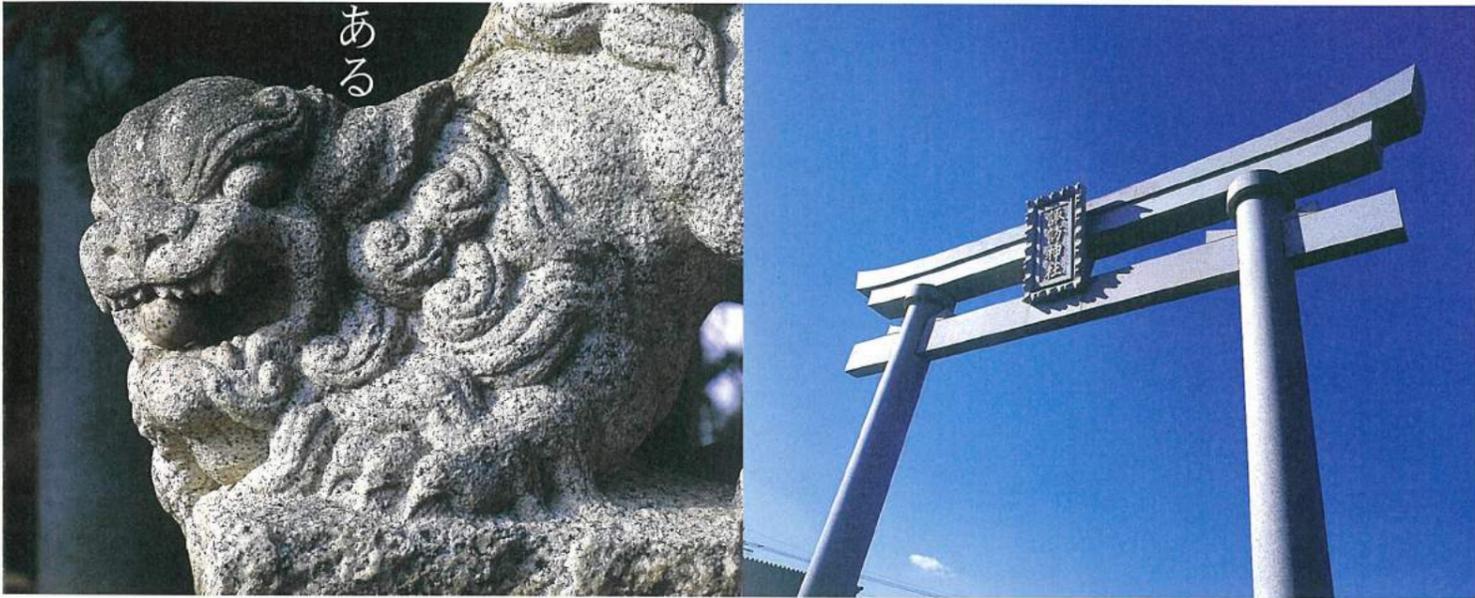


森忠石棧店

MoriChu
 the stone mason
 1908



石と遊戯ぶ瞬間がある。



人が子供から大人に成長し、円熟していくのと同じように、石も長い年月と共に歳をとり、少しづつ違う味わいを醸し出してくれる。陽の当たるところでは白っぽくなったり、雨風の摩擦を受けるところでは風化もする。それはただ古ぼけるのではなく、微妙なコントラストの違いや彫の深みから、やさしさと落ち着きを生んで、そこに育まれてきた歴史や風土、人の想いや温もりを映し出してくれる。参道、鳥居、狛犬、灯籠、玉垣、水屋、双盤石、天水受…。様々なものを包み込み、静かに私たちに護ってくれる。

写真・狛犬／三代目 森澤平八作
 石碑／四代目 森澤 實作
 獅子／五代目 森澤達矢作

森忠石棧店

MoriChu
 the stone mason
 1908

石に學ぶ瞬間がある。

「生きている石」

一般的には石は硬いというイメージだが、柔らかい石、粘りのある石、もろい石、多様な種類があり、その性格もさまざまである。例えば、阿賀野市で採れていた「草水石」は硬いが粘りの少ない石である為に、石を割る時は素直に割れてくれたり、逆に粘りのある石は思うように割れてくれなかったりするものである。

石目と呼ばれる石の割れやすい方向を読み、位置を決めて「せつと」とよばれるハンマーを、のみ、こやすけ、せり矢など、石を割る道具目掛けて振り下ろす。「石割り」のその瞬間、手に伝わる振動、感触、音、そしてほんのわずかな匂い。石の呼吸を感じながら、石との対話を楽しむ…。

(写真・施工/森忠石材店)

MoriChu
the stone mason
1908

森忠石材店

石を視つめる瞬間がある。

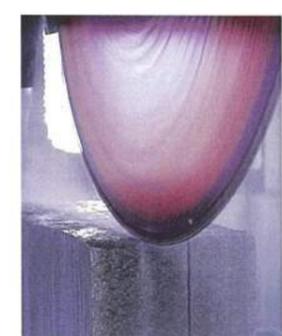


光を受けた石には、様々な情景が映し出される。大谷石の温和でやわらかな表情に、きれいに磨いた御影石の反射ときらめきに、黒御影石の透明な中から湧きあがる複雑で神秘的な黒色に...。思わず永遠の時代に吸い込まれていくような錯覚さえ覚える。

石の存在感もさることながら、表面の仕上げの違いでもその表情は変わる。ピシヤン、小たたき、のみ切り等でやさしく繊細に仕上げた石は、素材でどこか懐かしいような...。一方、割り肌（コブ出し）で仕上げた石は落ち着きのあるどっしりとした影を映し出してくれる。

石に永遠の願いを刻むとき、石は、その人の想いを映し出す...。

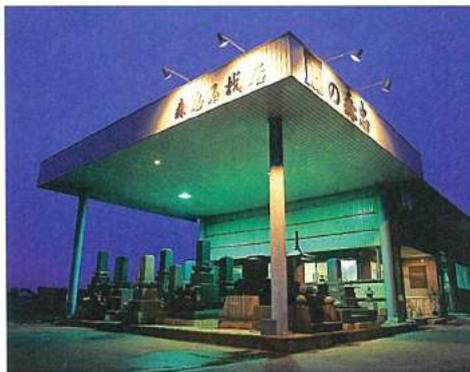
(写真・石彫り／五代目 森澤達矢作)



MoriChu
the stone mason
1908

石心傳心

ishin denshin



有限
会社

森忠石棧店

〒950-1262 新潟市南区西白根177
TEL 025-373-4421 FAX 025-373-6840
<http://www.morichu-sekizai.co.jp>